

第十一章

ゴドウイン氏の、両性間の情愛が将来消滅するという推測——その推測を支える見かけの根拠は乏しい——恋の情熱は理性とも徳とも矛盾しない

ゴドウイン氏の社会制度は、それが完全なかたちで確立されるのであれば支持しうるが、その前提自体が現実には成り立ちそうにない。というのも、その制度をすぐに崩してしまうはずの自然的な要因が、そもそもの確立を阻んでおり、しかもそれらが変化する見込みもないからである。世界の歴史を五千年か六千年ほど遡ってみても、男女の情欲が衰えたり消えたりする兆しはまったく見いだせない。年老いてすでに自らはその情を感じなくなつた者が、これを攻撃してきた例は古くからあるが、道理にも説得力にも欠けている。生まれつき冷淡で恋を知らない人が、この情が人生の快樂にどれほど寄与するかを正しく評価できないのは無理からぬことであり、また、若い時期を放縱に費やし、老いて肉体の衰えと悔恨を抱えた人が、この種の快樂を空虚で永続的な満足をもたらす

らさないと非難するのも理解できる。しかしながら、純粹な愛の喜びは、磨かれた理性と高い徳の基準に照らしても十分に耐えうる。徳にかなつた恋の真の喜びを一度でも知つた人であれば、どれほど多くの知的な楽しみを経験しようとも、人生のなかで最も明るい季節としてその時期を深い愛着をもつて振り返り、もう一度生き直したいと切望するだろう。知的快楽が感覚的快楽に勝るとされるのは、それがより「実質的」あるいは「本質的」であるからではなく、むしろ長く味わいややすく、広がりが大きく、飽きにくいからにほかならない。

享楽は節度を失うと本来の目的を損なう。晴天の下、美しい田園や絶景を歩き回る楽しみも、度を越せば痛みと疲労へと変わる。滋養豊かで活力を養う食事も、抑えの利かない食欲のおもむくままに摂取すれば、強さではなく、かえつて虛弱を招く。飽きのこないはずの知的な喜びでさえ、休みなく追い求めれば身体を損ない、精神の鋭さと活力を靡耗させる。ゆえに、乱用されうるという一点だけを理由に、快樂そのものの正当性や現実性を否定することは妥当ではない。道徳を帰結の計算とみなすゴドワイン氏の立場や、一般的の有用性から神の意志を読み取ろうとするペイリー大執事の見解に従うなら、不幸な結果を招くおそれがある小さい感覚的快楽は、道徳に反するものではないことになる。

しかも、知的修養や研鑽のための十分な余地を残す節度を守つてそれを享受するなら、人生における快の総量はたしかに増大する。友情に支えられた徳にかなう愛は、人間に本性に即した感覚と知性の最も調和のとれた結びつきとして深い共感を呼び起こし、洗練された最高度の満足をもたらすのである。

ゴドワイン氏は、感覚的快樂は劣るものとみなし、「男女の交わりに付隨する一切の事情を取り扱えば、人々は概してそれを軽蔑するだろう」（第一編第五章、第三版は第一編七十一頁から七十二頁）と述べる。しかしこれは、樹を愛する人に向かつて「枝ぶりや美しい葉をすべて取り去つてみよ。裸の幹にどれほどの美が残るか」と言うのに等しい。称賛の対象となつてているのは、枝葉を備えた樹そのものであつて、裸の幹ではない。対象の一要素だけを全体から切り離してしまえば、そこから喚起される感情も、美しい女性に対する感情とマダガスカル島の地図に対する感情ほどに遠く隔たつたものになり得る。人を恋に向かわせるのは、女性の身体の均整や生氣、官能的で柔らかな気質、情のこまやかさ、想像力や機知といった点であつて、単に性別という区別それ自体ではない。恋の激情に駆られて、人が社会全体の利益に反する行為に及ぶことはあるが、もし誘惑が性別以外の魅力をほとんど欠いた姿で現れるのだとしたら、それに抗うのはた

やすかつたはずだ。ゆえに、付隨する要素を取り去つてみせ、そのうえで劣つていると論じるやり方は、磁石の吸引力を生む本質的な要因を取り除いておきながら、その力は弱いと断ずるのに等しい。

あらゆる享楽の場面において、官能的なものであれ知的なものであれ、その結果や影響を見通して判断する理性こそが、最も有効な歯止めとなり、適切な抑制と正しい指針を与える。理性が磨かれ高められれば高められるほど、感覚的な楽しみや官能的な快楽の行き過ぎや乱用は抑えられるが、快樂そのものが失われるわけではない。

筆者はすでに、部分的な改善に上限がないとしても、それだけで進歩が無限に続くと結論づけることはできないと示した。たしかに、明確な前進の例は数多く挙げることができるが、それをもつて無限の進歩が保証されるとみなすのは妥当ではない。他方で、男女間の性欲が弱まり、やがて消えていく方向への変化は、これまで一度も観察されていない。したがつて、性欲の消滅を見込むのは、哲学的な妥当性を欠いた、根拠の乏しい推測にすぎない。

歴史はまた、どれほどの知性を備えた人であつても、節度を失い快樂に溺れる例が少くないことも示している。その一方で、反対の例もたしかに少なくはないが、強い知

的努力には、この種の情念の支配を弱める傾向があるのも事実である。しかし、その効果が社会全体のうえに、誰の目にも明らかな変化として現れるほどになるためには、人類の大多数が、現在の最も優れた人びとさえも上回る水準にまで達する必要がある。人類の向上に限界が来たとは考えないが、ここで重要なのは、どの国においても、下層の人びとが欠乏と重労働から十分に解放され、高度な知的向上に振り向けられるだけの余裕を得る見込みは、きわめて乏しいという点である。